劇団カミヒトエ「ヤヴノナカ」

昨年と本年の「リーディング＋（プラス）」の違いに驚きました。昨年よりも「プラス」部分が多かったですね。それは社会人劇団のチャレンジにも感じれました。こういったチャレンジが「社会人で時間がないながらも演劇に携われる」という可能性に関心がある方々に勇気を与えているように感じました。今後もぜひ続けていってもらえたら、と陰ながら応援しております。さて、その「プラス」というのは拝見するに、【朗読者が「役」を背負う】だけではなく、今作でいうと【朗読する人物が「劇団員役（ここがプラス）」を演じその上で「SFの中の登場人物」を背負う】ということだと思っています。今回はそれに加え、音響と照明に凝っていて、従来の上演と見まごうほどでした。視覚効果としても楽しませていただきました。しかし、これにはデメリットもあり「リーディング」という状態のいくつかに「台本を持った立ち稽古」に見えてしまう瞬間があったことでした。さて、この問題に立ち向かうのかどうかは、昨年と今年観せていただいて、今後のカミヒトエさんの課題かもな、と感じています。「リーディング」としての価値観を見出して行くのか？「立ち稽古」の危うさを回避する演出を開発するのか・・・？
また、物語の構造に関してですが「藪の中」構造でありながら、「誰が語っているのか？」がわかりにくかったです。むしろ「新人からの台本」の一方向に感じました。３つに台本を分けるのならば、「３人それぞれが手分けしてきて台本を提出した」ということにして、【同じ書き出しで、同じ事象を語っていてずれて行く】というほうが「藪の中」ぽかったように思います。更にいうと、芥川の藪の中自体「誰が殺したのかを裁かれている」というシンプルな構造なので、観客は興味を持って〈視点の違い〉に面白味を感じやすいです。というのも、できるだけシンプルに語っておかないと、この構造ではただただ難解にさせてしまいます。シンプルにするためには例えば、最初から「劇団員の誰が悪いか？」から割り切って始めて、お客さんが〈視点の違い〉だけに興味を持ってもらえるようにもできたと思います。色々と書きましたが、リーディング＋（プラス）は、社会人劇団の新しい可能性を秘めていると思っています。さらなるご発展と継続を楽しみにしております。

村上慎太郎